

「法を盾にした国家権力のこわさと少女たち」

国際医療福祉大学院 医療経営管理分野 医療経営戦略コース
修士課程 h-MBA コース 1年 坪（あくつ）むつみ

異常なまでの黒い圧力をはじめて感じました。

そして、いつ自分もそのような立場に追い込まれるかもしれないと思うと恐ろしさも感じました。村木さんのまっすぐな力強さ、自分を信じ、真実を信じ、戦う勇気に心身ともに熱くなりました。

村木さんから「郵便不正事件」の概要について説明があり、改めて事件を知りました。

当時報道されていたのは、検察側の筋書きに近い内容でした。

社会的にも確定していないにもかかわらず、私自身もおかしな話と感じつつ、報道される内容を真実と思い込んでいることに気づきました。

その裏では、「プロ」と「アマチュア」でリングにのせられた状態で村木さんが、長い長い戦いをしいられることを知りませんでした。なぜそのような戦いが必要なのでしょう？

検事が事件の原案をつくってしまうことが慣例化されていることに驚きました。

推測をしていろいろな事実と照らし合わせ、真実を見出していくことは、私たち訪問看護の中でもあります。訪問して、病状が変化していたり、転倒されていたり、その事実とその事実が起こりうる要素を検証していくことは、いくつかの推測をたてることがあります。

あくまでも推測であり、原案ではありません。

真実はいろいろなことで構成されています。思い込みがないよう気を付けて対応しています。

人を裁く立場の方が、まるで決められた事務作業のようにしていくことは、法の下に仕事をしている方であるにもかかわらず、公平性に向け、さらに真実を改ざんするということは検事自身を追い込んでいる組織全体疑いを持ちました。

拘置所で村木さんが垣間見た収監されている受刑者たちは、現在の社会に取り残された人々のようでした。負の回転扉。支援が必要な子供ほど、つながらない。

「共生社会を創る愛の基金」へとつながっていくことも、その活動の大切さ、救う原動力を知りました。できることなら、その活動に参加させていただきたい思いです。

私も娘がいます。成人していますが、社会に出て、経験値が低い分、目に見えない危険な環境に行くこともあるかもしれません。

今の大都市の中でみえる生活の貧困、親子関係の希薄さ、職場内での関係性、確実に関係性が違ってきていることをいろいろなご家庭をみていて感じます。専門的な話より、もっと人としてどう生きたいのか、興味のあることはなにか、何をしたいのかなど日常的に話せる関係性が大切だと思いますが、コミュニケーション不足時代、どのようにコミュニケーションをとっていいのかわからない時代になってきているように感じます。その歪みが少女たちに影響しているのでしょうか。講義ありがとうございました。